男女共同参画に関する情報交流誌

あいのかぜ

VOL.35

2013・春号

“あいのかぜ”は、男女共同参画社会の実現に向けて、市民一人一人が男女共同参画に関する正しい理解と認識を深めることを目的に、公募市民３人からなる編集委員によって企画・編集された情報交流誌です。

編集　男女参画・ボランティア課
（〒930－8510　新桜町７－38）
☎443－2051　FAX443－2176
danjyo-volun@city.toyama.lg.jp

特集 「自分のために」「誰かのために」 和気あいあいと、男性料理教室

奥田北地区センターで開かれている「男性料理教室」は今年で開講６年目。富山市のシニアライフ講座「料理教室」を卒業して、さらに料理を楽しみたいという男性たちが、エプロン姿で料理の腕を磨いています。16人が参加する男性料理教室の様子を、あいのかぜ編集委員がレポートします。

＜料理教室に参加したきっかけは＞

参加者のほとんどは、定年を機に料理を始めたそうです。現在この料理教室の参加者の平均年齢は73.4歳。奥さんに勧められて参加した方や、自分のことは自分でできるようにと将来の生活も見据えて参加を決めた方、定年後に始めた野菜作りで自分で作った野菜をおいしく料理したいからという方など、それぞれ参加のきっかけがあったようです。

はじめに先生から作り方を聞き、４、５人のグループに分かれて調理に入りました。レシピを見て、みんなで分担しながらの作業です。

この日のメニューは、おもてなし料理「魚のみぞれ煮」「和風ファルシー」「青菜の柚香（ゆこうあ）和え風」「きのこ汁」「白ごまムース」の５品でした。

＜家庭でも料理を？＞

この質問に、ほとんどの方が「家でも料理をする」と答えられたのには感心しました。皆さん、料理教室で作ったものを弁当箱に入れて持ち帰り、家族の感想を聞いて「おいしい」と言われたものを家でも作るそうです。ご夫婦で一緒に台所に立つ方や、週に３回は料理を担当しているという方もいらっしゃいました。「フライパン料理は、お父さんじゃなきゃ！」と実力を認められているお話や、お孫さんの誕生日には２日ほどかけて、おかずからケーキまで手作りするというお話など、楽しく伺いました。

＜料理をするようになって気づいたこと＞

「献立を決めるところから始まり、調理、片付けなど。これを一人でやるのは本当に大変」「女性の気持ちが分かった。」という声をたくさん聞きました。

自分でこんなにおいしい料理を作れるのだという喜びから「自分のために」料理するという方、作った料理を家族がおいしいと言ってくれるのが嬉しくて、「誰かのために」料理するという方など、その思いはさまざまでした。

皆さんとても手際が良く、そして何より、お互いの包丁さばきや手際の良さを褒めあいながら、和気あいあいと、とても楽しそうなのです。先生は「皆さん、本当に一生懸命なんです」とおっしゃっていました。

料理を通して気づいたこと、料理を通して出来たつながり。60代以上の男性には、料理は女性がするものという意識が強いのではないかと思いますが、参加者の皆さんの笑顔に、男女の枠を超えてトライすることの大切さを見た思いがしました。

REPORT（レポート） 男女共同参画とやま市民フェスティバル2012

平成24年10月28日に、「男女共同参画とやま市民フェスティバル2012」が、「女子力（じょしりょく）」をテーマに開催されました。
あいのかぜ編集委員が報告します。

講演会

服飾史家・エッセイスト・明治大学特任教授で、富山市出身の中野香織（なかのかおり）さんが、「女と男の素敵な関係が時代を動かす」と題して講演されました。

「呉羽小学校の頃、恩師から教わって身につけた読み書きの習慣や、高校時代、自転車で呉羽山を越えて培った体力と忍耐力。そんな経験から身についたいろんな“力”が今の自分に結びついている女子力でしょうか。」「女子力を輝かせるには男子力も大切で、相互に働いてこの世は成り立っている。」「素直に感動する心も大切で、結果を恐れぬ最善力も、無駄だと思えるいろいろなことにチャレンジする学び心も大切にし、各方面にアンテナを張りめぐらせて毎日を送っている。」など、パワフルで素敵なお話を聞くことができました。

トークセッション「女子力ってなんだろう？」

さまざまなジャンルで活躍する女性たちを招き、「今」を生きる女性たちの女子力とは何かを考えるトークセッションは、すべての女性へのホットなメッセージになりました。

【ゲストトーカー】
中野 香織さん
加藤（かとう） 千尋（ちひろ）さん（2007年青年海外協力隊員、警察官）
清水（しみず） 美奈子（みなこ）さん（株式会社インテック システムエンジニア）
橋本（はしもと） めぐみさん（農業家 有限会社土遊野（どゆうの））

加藤さん…雑誌などで「女子力」に関する記事を見ると、洋服やお化粧など「見た目」でどれだけキラキラした感じに見えるかをとても重視しているように感じます。私が青年海外協力隊員として滞在したメキシコでは、女性は田舎では「家を守る」、逆に都会では「バリバリ働く」イメージで、地域によって違いました。

今の世の中は、「平等、自由、何でもあり！」なので、しっかりと自分で考えて、自分を制御できる考え方が必要だと思います。そのためにもマナーや一般常識をしっかり身に付けることが大切で、自分もそうありたいと常々考えています。

左から、加藤さん、清水さん、橋本さん、中野さん

清水さん…ＩＴ業界は男性が多いイメージがありますが、皆さんが思う以上に女性は多いのです。大半がデスクワークで、ミスがないように綿密にプログラムする仕事が多いので、女性の細やかさとの相性はいいと思います。

私は女の子の母ですが、女の子だからとか男の子だからではなく、自分らしさを大切にしてあげたいです。

橋本さん…就農して以来、種をまいて育てる、生き物を赤ちゃんから育てることに触れていて思うのは、「手で愛（め）でる、子供を育てる、手作りでごはんを作る」など、女性本来の母性と農業は、共通点が多いということです。女子力という点では、ぬくもりとか手仕事とか、そういうところに素敵なものを感じます。

女性に限らず専業で農業を営んでいる人が少ない中で、体力的にも大変なイメージを持たれがちですが、「明るくなったら起きて仕事をして、暗くなったら眠る、体が資本だからちゃんと食べて体を休める」という規則正しいリズムで、楽しく無理なく生き生き働いている自分の姿を、若い世代に見ていただけたらと思います。

中野さん…女性の魅力の一つにギャップがあると思います。「あの時はああだったのに、今度は全然違う」といった印象のギャップを演出するには、気持ちの切り替えが大切です。だから何を着ても大丈夫なように、普段から映画を見るなど、心の感性の引き出しをいっぱい作っておくようにしています。身に着けるものと心の感性が合っていないと、どんな服も似合わないと思います。

次世代に伝えたいことは、女子力（女らしさ）、男子力（男らしさ）を意識しないで、「自分らしく、自分は何をしたいのか？」を大切にして、自分の気持ちに素直に問い、答える感性が必要だということです。そういう感性の育成や訓練のためには、周囲や社会が「こうあるべき」「これが正しい」という文化の押しつけをしない方が、その人らしい「女子力、男子力」が見つけられると思います。

男女共同参画社会づくり 作文コンクール

男女共同参画社会の実現に向けた意識を高めるため、市内の中学生を対象に男女共同参画に関する作文を募集したところ、257点の応募がありました。応募された皆さん、ありがとうございました。入賞された方と、最優秀作品を紹介します。

【最優秀賞】小笠原隼人さん（山室中学校２年）

【優 秀 賞】荒井美佳子さん（山室中学校２年）
岩井渚紗さん（大沢野中学校１年）
江畑美穂さん（芝園中学校１年）
老田 叶さん（西部中学校２年）

【佳作】伊東望羽さん（東部中学校１年）
小幡桃子さん（北部中学校２年）
表寺魁吏さん（山室中学校３年）
新明郁海さん（堀川中学校１年）
角 遥菜さん（大沢野中学校１年）
中川侑空さん（芝園中学校２年）
牧 真由子さん（奥田中学校１年）
三舩翔太さん（山室中学校１年）
山岸海人さん（三成中学校２年）
山下百合恵さん（月岡中学校３年）

最優秀作品

「共働きの両親」

山室中学校２年　小笠原 隼人

僕の家は、父が放送番組などを制作する会社を自営しています。母は、同じ会社で事務の処理をしたり、撮影の手伝いをするために一緒に現場へ時々でかけたりしています。

父の実家は青森県にあり、家族のみんなと離れて一人で今の会社を設立し、三十年以上富山で生活しています。テレビ番組の撮影は、時間も曜日も天候も関係ありません。夜中に突然連絡が入り、カメラをかついで出かけた事もあったと聞きました。自分の体調が悪くても「撮影の予定は変更できない」と出かけて行くところを見た事も何回もあります。

母は、そんな父や社員の人を気遣いながら同じ会社で仕事をしています。「体力勝負、体が資本の仕事だからね！それをサポートするのが母さんの仕事！」と笑って言っていました。そんな中で、家事や僕たちの世話もしてくれます。仕事で帰りが遅くなったりすると「ごめんね。ごめんね。」と言いながら食事の準備をしています。学校での出来事も気にしてくれています。食事の準備をしながら僕と話をしている時間で、「疲れやイヤな事も忘れてしまう。」と言います。「撮影に同行した時に出会った人達や子供達の笑顔が大好きだから、この仕事を与えてくれたお父さんに感謝しているかな。」と言っていたのが心に残っています。

どんなに疲れていても、休みの日には家族との時間を一番に考えてくれる父。家の事や僕の学校行事や部活の試合には必ず応援に来てくれます。母も、お弁当を作ったりしながら一緒に応援してくれます。時にはケンカもあるけれど、お互い気遣い協力し合って仲良くしている両親が大好きです。僕もできるだけ手伝いをするようにしています。「男の子なのに、お手伝いで最優秀賞だよね」と母が言ってくれた時は、おかしかったけど嬉しかったです。共働きの両親だから、家族が協力しなければ大変という気持ちから、自分も手伝えるのだと思います。

男性と女性が助け合って仕事をし、家族を守り、明るく生活していくことは素晴らしいと思います。

僕が将来家庭を持った時、お互い仕事をしていても家族が笑いながら過ごせれば幸せだと思います。

「あいのかぜ」新・編集委員を募集します

【応募資格】 市内在住の20歳以上の方で、平成25･26年度の２年間、編集委員として活動し、平日の日中に開催される編集会議に参加できる方
※「あいのかぜ」は年２回発行。１回の発行につき編集会議は５回程度。
【仕事内容】 企画、取材、原稿作成、レイアウトなど
【募集人数】 ３人（面接により選考）
【任　　期】 委嘱した日から平成27年３月31日まで
【応募方法】 ４月26日㈮までに、所定の応募用紙を、直接またはFAX、郵送、Eメールで**男女参画・ボランティア課**（市役所３階：〒930－8510　宛先の住所地不要）へ。
※応募用紙は、男女参画・ボランティア課、男女共同参画推進センター〈注〉、各総合行政センター市民生活課・市民福祉課にあります。（Eメールで応募の方は応募用紙のデータを送信しますので、ご連絡ください。）
〈注〉男女共同参画推進センター（湊入船町）は３月31日㈰まで休所。4月１日㈪からCiC ３階（新富町一丁目）へ移転します。

編集後記

編集委員の経験を通して「男女共同参画社会」の意義を知り、私も新たな一歩が踏み出せました。たくさんの出会いに感謝します。（春日編集委員）

素敵な女性たちに出会えました。等身大で懸命に、ひたむきに歩んでいる彼女たちに「今、ここに自分として生きていく」ことの勇気と感謝と自覚を学びました。瞳（Eye）を開いて、愛（AI）を持って…自分らしく生きましょう、富山の女性たち。（野上編集委員）

この2年間、いろいろな方々とお会いし、今まで自分の知らなかった場所へ取材に訪れ、これからの人生の時間を大切に生きていかなければと、改めて感じました。勉強させていただき、有意義な時間だったと思います。（村下編集委員）